

木曜日

森岡 正作

春を待つ

冬帝の富士を娶りに降りて来る
義士の日の遅れて来たる宅急便
絵本より跳び出たやうに北狐
数へ日の木曜日なら空いてゐる
数へ日の三面鏡に三つの顔
無駄口をたたかぬ男海鼠噛む
鴨鍋の最中に喰らふ肘鉄砲

「冬来りなば春遠からじ」とか「実るほど頭を垂るる稲穂かな」等々、生活が地面に根ざしていたことを昔の人は実に良い言葉で教えてくれる。とは言え現代の私は時代の変化の早さや情況の複雑さから、つい堪え性がなくなってしまう。そんな他愛のないことを考えていて、登四郎先生の最晩年の〈春を待つ 臥すこと多き身なれども〉と〈何なすと言ふにあらねど春を待つ〉という句に出会った。

日本は自然が豊かで、その四季の感じをもつて一年間を春夏秋冬と分け、春を起点としている。辞書では、春は草木が「張る」意とある。つまり、瑞々しく勢いがあるということであろう。それに私たちは希望とか明るさなども加えて春を待つ。言わば先生のお気持ちの思いつつ、春の足音に耳を敲っている今日この頃である。